

実習における自己評価の変化について

A Study on the Change of Self Evaluation in Field Practice.

牛 込 彰 彦
(こども学科 教授)

要旨 本研究は、保育者養成校における実習の充実を図るために行われた。素材として保育実習生の実習に対する自己評価を用いた。素材採取を実習前後を含む3期とし、その変化について検討した。その結果、評価下位項目において自己評価の変化が大きいものとそうでないものがあることがわかった。その結果から実習における課題として効果的な項目を知るに至った。

【キーワード：実習 自己評価 変化】

I. はじめに

本学は、卒業と同時に幼稚園教諭二種免許状と保育士資格が取得できる養成機関である。学生は、2年間の中で、多くの実習を経験し知識や技術を向上させている。幼稚園教諭二種免許状取得にかかわる4週間に亘る幼稚園実習は2期に分かれ、1週間を1年次9月に実施し、残りの3週間を本実習として2年次5月に実施している。また、保育士資格取得にかかわる施設実習は12日間を1年次2月に実施している。さらに22日間に亘る保育所実習は22日を2期に分け、2年次の7月と9月に実施している。

本研究は、実習を重ねるにつれ個人内の自己評価がどのように変化するかを検討しその傾向を知るとともに、評価下位項目において変化に差異があるのかを分析した。得られた差異にどのような意味があるのかを検討することにより、効果的な指導の在り方に対する知見を得た。

II. 方法

1. 調査対象

平成27年度の本学における2年生 104名

2. 調査項目

図1は、本学で使用している幼稚園教育実習評価表および保育実習評価表である。

幼稚園教育実習評価表は4つのカテゴリーと20の下位項目からなっている。また、保育所実習評

価表は4つのカテゴリーと15の下位項目からなっている。今回、幼稚園教育実習と保育所実習の両実習に亘り、個人内評価を検討するため、下位項目に関しては類似している15項目をデータとして採用した。

以下は、データとして採用した4つのカテゴリーと15の下位項目である。

I 実習態度

- 1 (仕事に関して) 責任感や積極性がある
- 2 明るさや協調性
- 3 挨拶や正しい言葉遣いができる
- 4 勤務上の諸注意を守る

II 子ども理解

- 1 発達段階の理解
- 2 (子ども) 一人ひとりの個性の把握
- 3 (子どもの) 友達関係の理解

III 保育技術

- 1 (子どもとの) かかわり方
- 2 適切な言葉かけや説明の仕方
- 3 周到な指導計画と遂行力
- 4 教材や教具の準備と環境整備

IV 保育者としての資質

- 1 表情の豊かさや(子どもへの)愛情、思いやり
 - 2 情緒、感情の安定性
 - 3 誠実さや明朗性
 - 4 研究心、向上心や創意工夫
- ・以下表記においては()内を省略する。

幼稚園教育実習評価表										保育実習評価表									
こども学科					コース					実習幼稚園名					短期大学				
学籍番号					実習生名					園長氏名					印				
実習期間					年 月 日 ~ 年 月 日					指導教諭氏名					印				
項目	内容	評価									5	4	3	2	1				
実習態度	実習状況(出勤時間、挨拶、身だしなみ、言葉づかい等)は適切である。																		
	実習日誌や指導書等の提出物の期限や指示内容を守る。																		
	適切な学習意欲・責任感等を持って取り組む。																		
子ども理解	明るさや協調性を持って取り組む。																		
	勤務上の諸注意を守って行動する。																		
	必要な職務内容を学ぶとする。																		
保育技術	子どもの遊びへの理解																		
	子どもの仲間関係への理解																		
	子どもの発達段階への理解																		
保育計画	子ども一人一人の興味・関心や活動の背景への理解																		
	子どもの理解の仕方への工夫																		
	子どもへの接し方・関わり方が適切である。																		
教師としての資質	授業掛けや説明の仕方が適切である。																		
	指導計画への取り組みとその遂行力、反省・評価は適切である。																		
	教材や用具の準備、環境整備等への取り組みは適切である。																		
総合評価	教育方針への理解や保育に対する研究心・向上心、創意工夫等がある。																		
	情緒・感情が安定している。																		
	誠実さや積極性がある。																		
総合所見	適切な自己観察力がある。																		
	表情の豊かさや子どもへの愛情、思いやりがある。																		
	【評価の方法・目安】 5段階評価で、該当するところに○印をご記入ください。 (5「優れている」、4「やや優れている」、3「普通」、2「やや劣る」、1「劣る」)																		
出席すべき日数	出席日数	欠席日数		遅刻		早退													
20日	日	病欠	日	遅刻	日	早退	日	理由:	理由:										
(前半・後半合計)		事故	日	その他	日														

図1 幼稚園教育実習評価表及び保育実習評価表

3. 調査データ

本研究では実習経験に伴う個人内の変化を見るために、次の3期のデータを取得した。

- 1) 2年次 6月 (幼稚園後期/応用実習終了後・保育所前半実習開始前)
 - 2) 2年次 8月 (保育所前半実習終了後・保育所後半実習開始前)
 - 3) 2年次10月 (保育所後半実習終了後)
- 3つの時期のデータが完全である2年生104名のデータを採用した。

4. 得点

評価はカテゴリー及び15の下位項目に対し5点法を用い、5点を一番高い得点とした。

Ⅲ. 結果および考察

1 各時期におけるカテゴリー別の得点

表1は幼稚園後期実習後(2年次6月)・保育所前半実習後(8月)・保育所後半実習後(10月)における4つのカテゴリーにおける得点の平均であり、グラフにしたものを図2として掲げる。

表1 3つの時期におけるカテゴリー別得点の変化

	幼稚園後期実習後	保育所前半実習後	保育所後半実習後
I 実習態度	3.88	3.65	3.88
II 子ども理解	3.72	3.41	3.67
III 保育技術	3.56	3.31	3.54
IV 資質	3.57	3.35	3.56

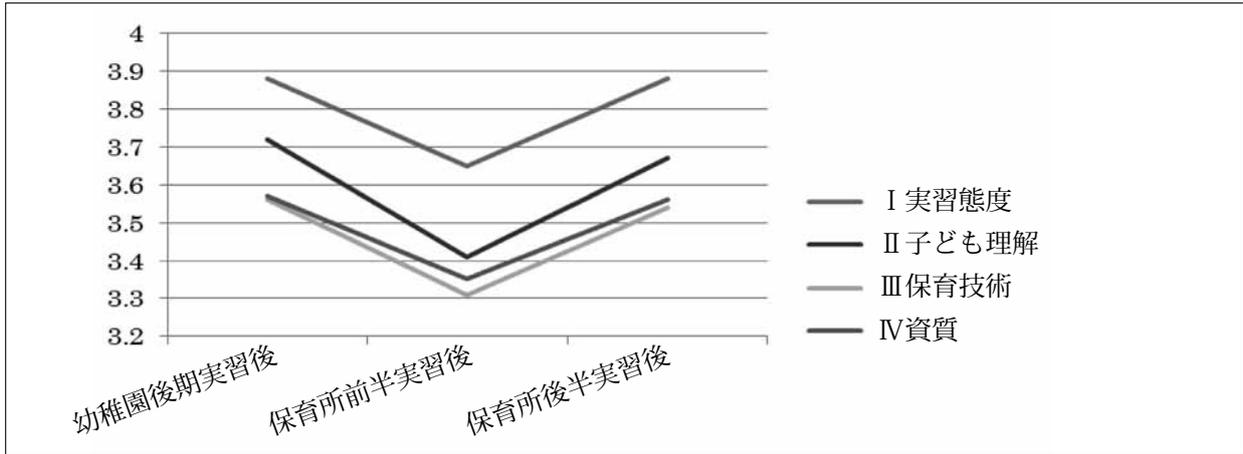


図2 3つの時期におけるカテゴリー別得点の変化

4つのカテゴリーすべてにおいて、幼稚園後期実習後を基準とすると保育所前半実習後に一旦下降し、保育所後半実習後に再び上昇しほぼ元の水準に戻ることがわかった。幼稚園後期実習後は、実習を終えた達成感や充実感により自己評価が上昇したと考えられる。また、保育所前半実習後では、新たな実習先で慣れないことや新しい課題などを見つけることで自己評価が下降したものと考えられる。保育所後半実習後は、幼稚園後期実習後と同様に達成感や充実感から自己評価が上昇したものと考えられる。また、保育所後半実習後は、客観的に考えれば、実習経験を積み重ねたことで、

絶対評価は幼稚園後期実習後に比べて上昇すると考えられる。しかしながら、実際の結果では、ほぼ同じかやや低い値となっている。これは、学生が無意識のうちに友達の姿などを参照し相対的に評価したためと考えることができる。

2 カテゴリー別の下位項目の変化

1) カテゴリー I における下位項目の変化

表2はカテゴリー I における下位項目の変化の平均であり、グラフにしたものを図3として掲げる。

表2 カテゴリー I における下位項目の変化

カテゴリー I の下位項目	幼稚園実習後	保育所前半終了後	保育所後半終了後
責任感や積極性がある	3.47	3.31	3.56
明るさや協調性	3.96	3.68	3.85
挨拶や正しい言葉遣いができる	3.94	3.77	3.95
勤務上の諸注意を守る	4.15	3.82	4.15

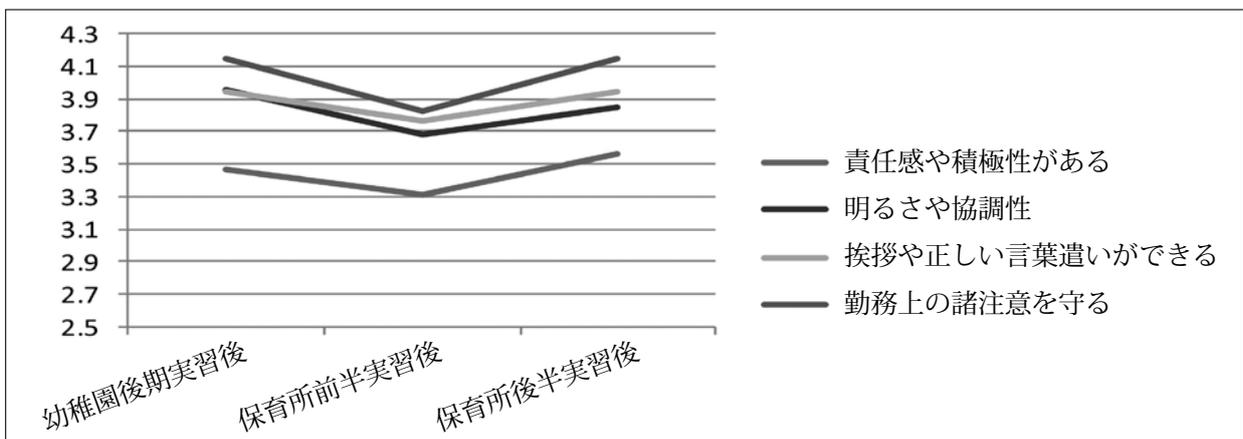


図3 カテゴリー I における下位項目の変化

カテゴリーⅠにおける変化を見ると、保育所前半実習後に一旦低くなり、保育所後半実習後にはほぼ幼稚園実習後の水準に戻っている。

2) カテゴリーⅡにおける下位項目の変化

表3はカテゴリーⅡにおける下位項目の変化の平均であり、グラフにしたものを図4として掲げる。

表3 カテゴリーⅡにおける下位項目の変化

カテゴリーⅡの下位項目	幼稚園実習後	保育所前半終了後	保育所後半終了後
発達段階の理解	3.32	3.07	3.28
一人ひとりの個性の把握	3.63	3.07	3.32
友達関係の理解	3.42	2.92	3.39

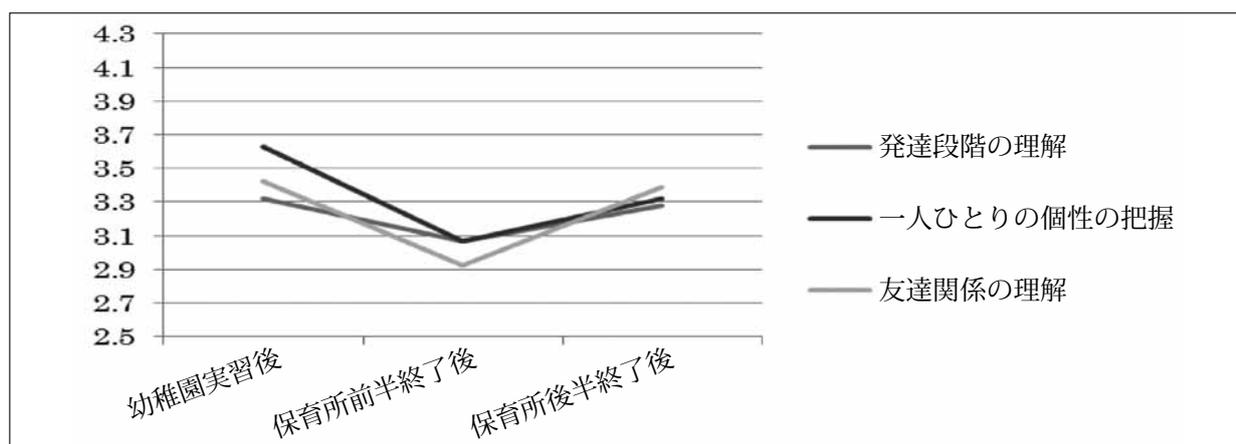


図4 カテゴリーⅡにおける下位項目の変化

カテゴリーⅡにおける変化を見ると、カテゴリーⅠと同様に保育所前半終了後に一旦低くなり、保育所後半終了後に上昇している。しかしながら、一人ひとりの個性の把握においての戻りが鈍い。

3) カテゴリーⅢにおける下位項目の変化

表4はカテゴリーⅢにおける下位項目の変化の平均であり、グラフにしたものを図5として掲げる。

表4 カテゴリーⅢにおける下位項目の変化

カテゴリーⅢの下位項目	幼稚園実習後	保育所前半終了後	保育所後半終了後
かかわり方	3.78	3.41	3.62
適切な言葉かけや説明の仕方	3.02	3.07	3.15
周到的な指導計画と遂行力	2.77	2.78	2.97
教材や用具の準備と環境整備	3.17	3.11	3.28

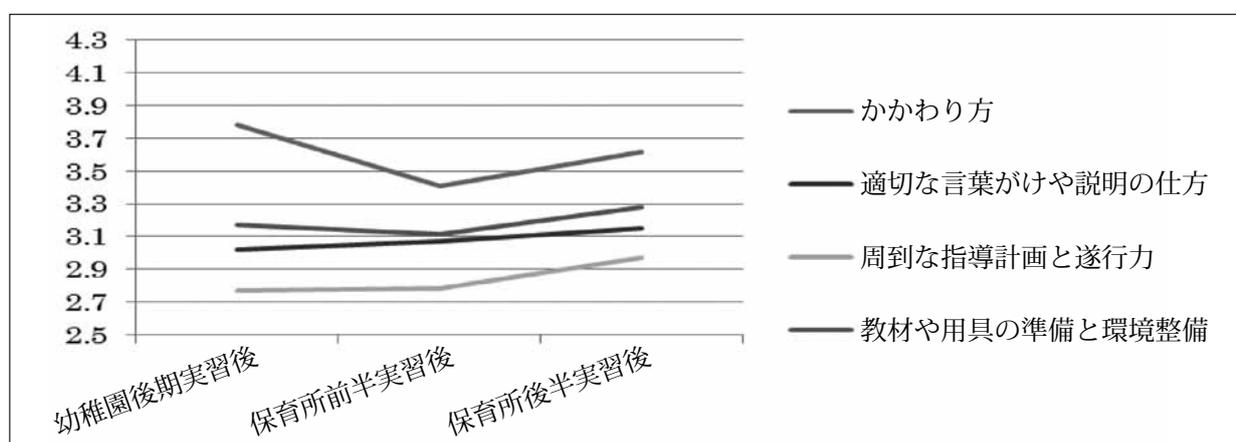


図5 カテゴリーⅢにおける下位項目の変化

カテゴリⅢにおける変化を見ると、下位項目のかかわり方はカテゴリⅡと同様に保育所前半実習後に一旦下がって、保育所後半実習後に再び上昇するという変化を示しているが、適切な言葉かけや説明の仕方、周到的な指導計画と遂行力、教材や教具の準と環境整備においては、保育所前半実習後の下がりが鈍く、保育所後半実習後の値が

幼稚園後期実習後よりも高くなっている。

4) カテゴリⅣにおける下位項目の変化

表5はカテゴリⅣにおける下位項目の変化の平均であり、グラフにしたものを図6として掲げる。

表5 カテゴリⅣにおける下位項目の変化

カテゴリⅣの下位項目	幼稚園後期実習後	保育所前半実習後	保育所後半実習後
表情の豊かさや愛情, 思いやり	4.08	3.71	3.9
情緒, 感情の安定性	3.7	3.62	3.7
誠実さや明朗性	3.61	3.4	3.53
研究心, 向上心や創意工夫	3.14	3.21	3.32

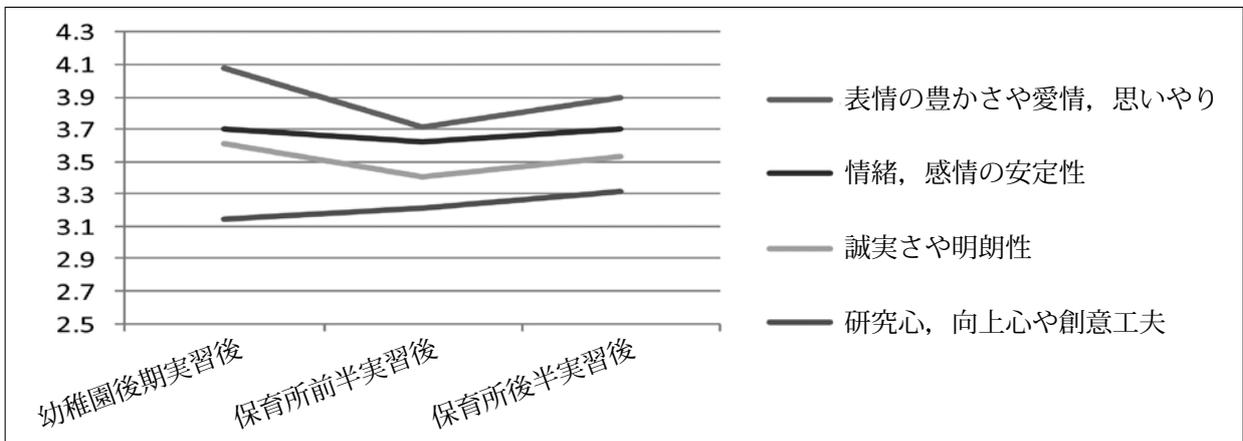


図6 カテゴリⅣにおける下位項目の変化

カテゴリⅣにおける変化を見ると、下位項目、情緒、感情の安定性および研究心、向上心や創意工夫の2項目は、カテゴリⅢに見られたような、保育所前半実習後の下がりが鈍く、保育所後半実習後の水準が幼稚園終了後よりも高くなる傾向を示している。

3 変位の比較

各時期の評価の変化は、その大きな要因である実習に関係していると考えられる。各カテゴリ

および下位項目において得点の変化が大きいものを検討するべく、次のように変位を定義し比較した。

変位：A-B間の差の絶対値とB-C間の差の絶対値の和を変位とした。

$$\text{変位} = |A - B| + |B - C|$$

1) カテゴリ別に見た変位の比較

表6はカテゴリ別に見た変位であり、グラフにしたものを図7として掲げる。

表6 カテゴリ別に見た変位

カテゴリ	幼稚園後期実習後	保育所前半実習後	保育所後半実習後	変位
I 実習態度	3.88	3.65	3.88	0.47
II 子ども理解	3.72	3.41	3.67	0.75
III 保育技術	3.56	3.31	3.54	0.26
IV 資質	3.57	3.35	3.56	0.28

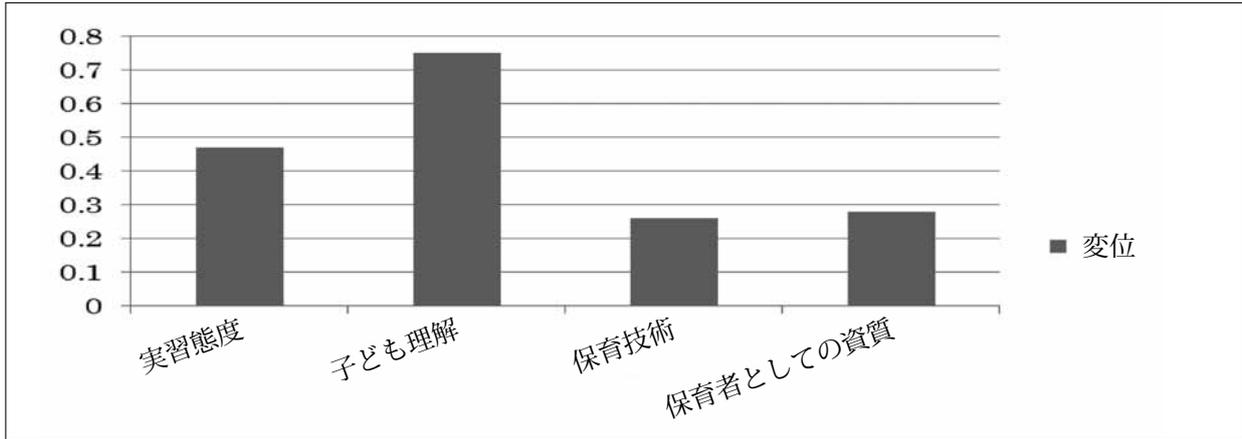


図7 カテゴリー別に見た変位

カテゴリー別に変位を見ると実習態度や子ども理解に比べて保育技術や保育者としての資質はあまり大きくない。このことは、実習態度や子ども理解は実習経験を通して大きく影響を受けるが、保育技術や保育者としての資質は、その影響を受けにくいと考えられる。さらに、これらの結果は4つのカテゴリーにおいて、実習を経験することによって効果的に学べるか否かに関係していると考えられる。すなわち、実習を通して効果的に学べるカテゴリーは実習態度や子ども理解であり、保育技術や保育者としての資質は実習を通じた効果的な学習は期待しにくいと考えられる。評価の4つのカテゴリーである実習態度、子ども理解、保育技術、保育者としての資質はともに大切な項目であり欠かすことは出来ない。しかしながら、

高い学習効果が期待できる子ども理解に力点を置き実習指導内容を検討し、学生に対し実習前指導および事後指導をすれば、今まで以上の大きな教育効果を生み出すことが期待できる。

また、目的の力点を子ども理解に置いた場合は、しっかりと睡眠をとって子どもと元気に活動することが必要になるため、日誌の記述等にも工夫が必要になってくる。

2) 各カテゴリーの下位項目における変位の比較

表7は各カテゴリーの下位項目の変位を示した表であり、グラフにしたものを図8として掲げる。

表7 各カテゴリーにおける下位項目の変位

カテゴリー	下位項目	変位
カテゴリーⅠ 実習態度	責任感や積極性がある	0.41
	明るさや協調性	0.45
	挨拶や正しい言葉遣いができる	0.35
	勤務上の諸注意を守る	0.66
カテゴリーⅡ 子ども理解	発達段階の理解	0.46
	一人ひとりの個性の把握	0.81
	友達関係の理解	0.97
カテゴリーⅢ 保育技術	かかわり方	0.58
	適切な言葉がけや説明の仕方	0.13
	周到的な指導計画と遂行力	0.2
	教材や用具の準備と環境整備	0.23
カテゴリーⅣ 資質	表情の豊かさや愛情、思いやり	0.56
	情緒、感情の安定性	0.16
	誠実さや明朗性	0.34
	研究心、向上心や創意工夫	0.18

実習における自己評価の変化について

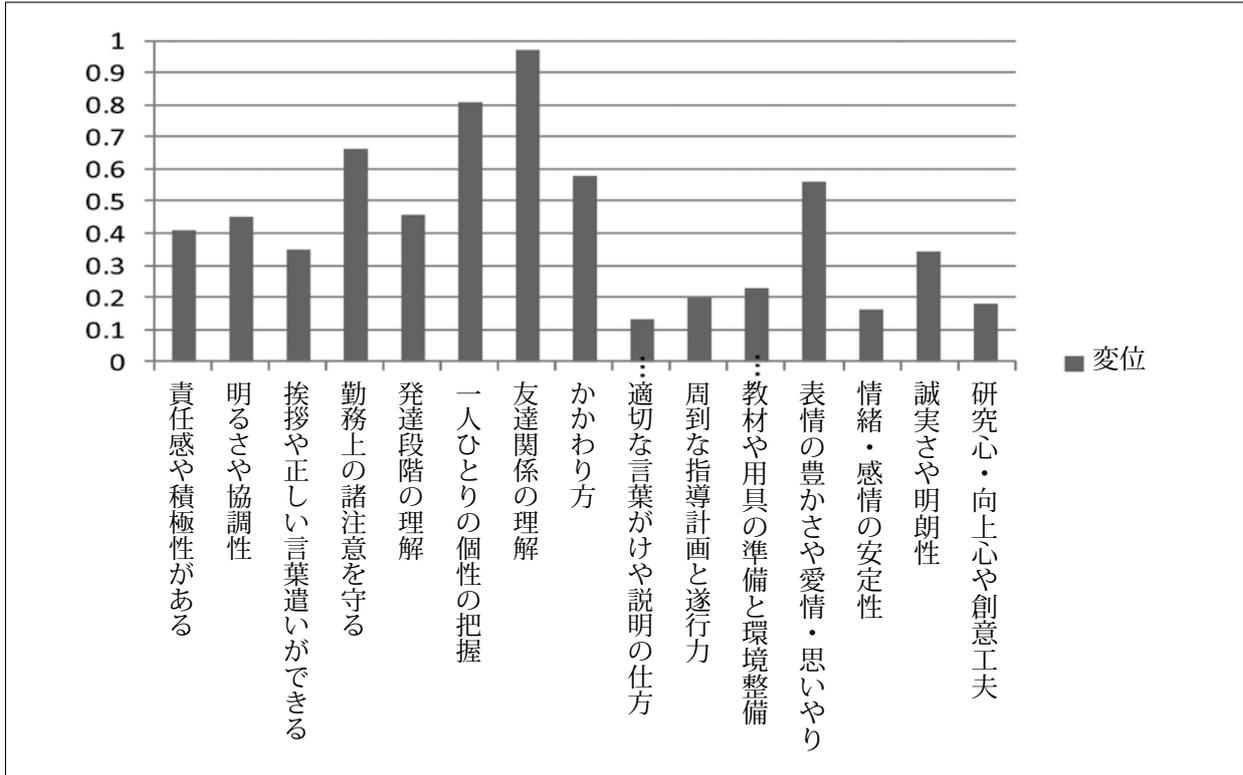


図8 各カテゴリーの下位項目の変位を大きい順に並べたもの

3) 各カテゴリーの下位項目における変位の比較
 の大きいものから並べたものである。また、グラフにしたものを図9として掲げる。

表8は各カテゴリーの下位項目の変位を変位

表8 各カテゴリーにおける下位項目の変位

下位項目	変位
友達関係の理解 (子ども理解 カテゴリーⅡ)	0.97
一人ひとりの個性の把握 (子ども理解 カテゴリーⅡ)	0.81
勤務上の諸注意を守る (実習態度 カテゴリーⅠ)	0.66
かかわり方 (保育技術 カテゴリーⅢ)	0.58
表情の豊かさや愛情, 思いやり (保育技術 カテゴリーⅣ)	0.56
発達段階の理解 (子ども理解 カテゴリーⅡ)	0.46
明るさや協調性 (実習態度 カテゴリーⅠ)	0.45
責任感や積極性がある (実習態度 カテゴリーⅠ)	0.41
挨拶や正しい言葉遣いができる (実習態度 カテゴリーⅠ)	0.35
誠実さや明朗性 (保育技術 カテゴリーⅣ)	0.34
教材や用具の準備と環境整備 (保育技術 カテゴリーⅢ)	0.23
周到な指導計画と遂行力 (保育技術 カテゴリーⅢ)	0.2
好奇心, 向上心や創意工夫 (保育技術 カテゴリーⅣ)	0.18
情緒, 感情の安定性 (保育技術 カテゴリーⅣ)	0.16
適切な言葉かけや説明の仕方 (保育技術 カテゴリーⅢ)	0.13

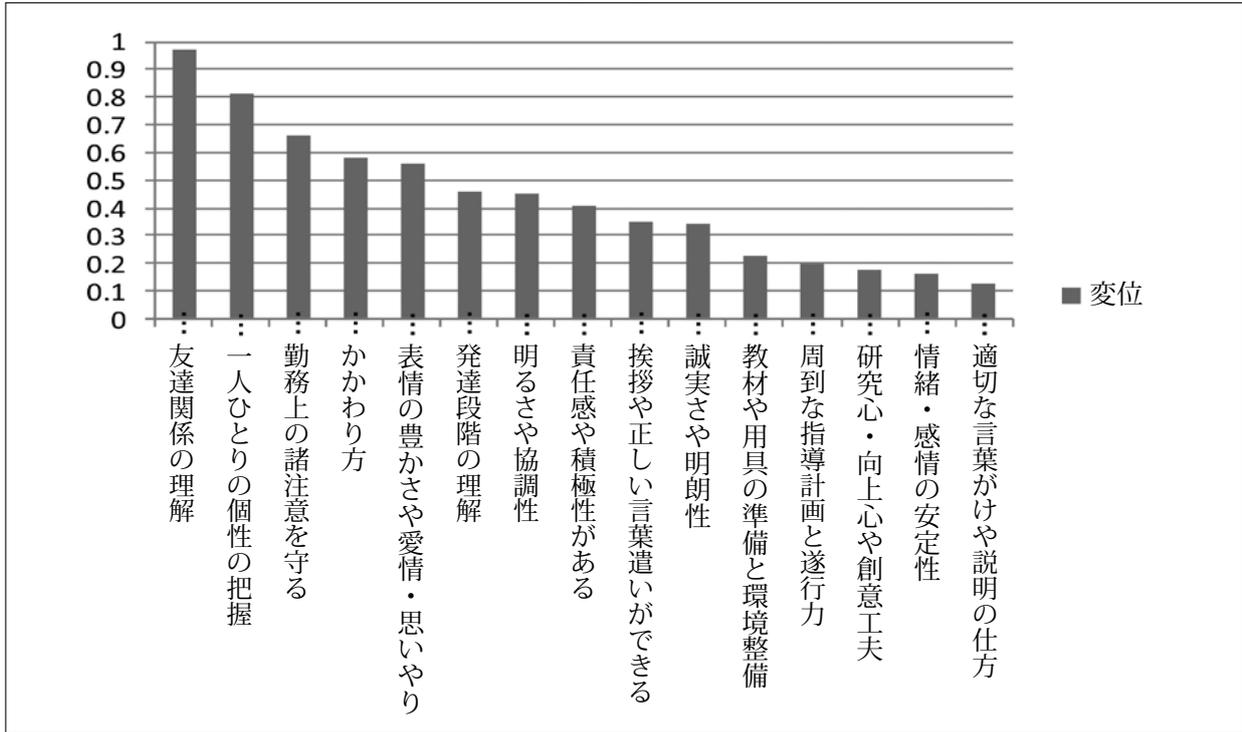


図9 各カテゴリーの下位項目の変位を大きい順に並べたもの

IV 結論

今回、保育実習生における自己評価の変化を実習時期と関連させて検討した。その結果、自己評価の変位について着目することにより、その変位の大きさから、実習を通して学ぶことが効果的である実習内容が見えてきた。これらの結果は、実習の目的や内容を考えるうえで、大きな示唆を与えるものである。ただし、今回用いたデータは、学生自身の自己評価であり、あくまでも主観的なものであること。これらに客観的な評価、すなわち実習先からの評価の変化を考え合わせて検討することが必要と考えられる。今後の課題である。

V 参考文献

- 中西利恵ほか 実習指導を高める教育方法の研究 (その3)
 相愛大学研究論集 2012, 28, p.167－180.
 守ほか 教育実習・保育実習における学生の自己評価の分析
 文化学園長野専門学校 研究紀要 2011, 3, p.3－15.